

はじめに

白石稲荷山古墳は、1933年（昭8）に最初の発掘調査が実施され、未盗掘の埋葬施設の中から豊富な副葬品が出土したことで知られる前方後円墳です。1985～87年（昭60～62）、藤岡市教育委員会による範囲確認発掘調査によってその規模が墳丘長140m、基壇を含む全長175mと推定されたことで、同時期の東日本でも屈指の規模を誇り、かつ、埋葬施設と副葬品の全容が明らかな古墳時代史を考えるうえできわめて重要な前方後円墳であることが明らかとなりました。1993年（平5）には国史跡として指定され、2019年（平31）2～3月には市教委、早稲田大学、群馬県立歴史博物館の三者による合同調査として、地中レーダーによる非破壊探査が実施されました。その成果は早稲田大学から報告書として刊行され、墳丘そのものや周辺に付随する外部施設（周溝、平坦面等）を検討するうえで良好な調査成果が得られています。これら多くの調査成果を踏まえ、文化財保護課では、2022年（令4）1月から、史跡整備に先立ってその内容や範囲の確認を目的とした発掘調査を実施しています。

上記の調査、及びここ数年の発掘調査により古墳の築造当初の姿を考えるさまざまな情報が得られていますが、昨年度の調査で、古墳墳丘の西側に他に例を見ない特徴的な平坦面の存在が確認されたほか、陪塚と考えられている十二天塚古墳、および十二天塚北古墳の墳丘形状が明らかでないなど、不明瞭な部分も残されていました。

本年度は、白石稲荷山古墳の墳丘周辺に残されたこれらの課題について、その様相を確認することを目的として発掘調査を実施しています。

今年度の調査成果

1. 墳丘西側の幅広平坦面（仮称）が盛土によって構築されていることが判明
2. 白石稲荷山古墳の北側には、北から入り込む谷地形が存在
3. 十二天塚古墳、同北古墳の墳形は不明瞭

墳丘西側の幅広平坦面（仮称）を部分的に掘り下げて調査したところ、旧表土面（古墳時代当時の地表面）を平らに整地し、ローム土主体／黒色土主体の2種類の土を交互に積む、という特徴の盛土が確認されました。この盛土は長さ40mのR-37東西トレンチ全域におよぶ大規模なもので、現地形と併せて考えると、幅広平坦面の大半が盛土で構築されたと考えられます。調査区と墳丘の位置関係から盛土が古墳の墳丘下へと続いていると推測できるため、古墳と一体でつくられたものと考えられます。

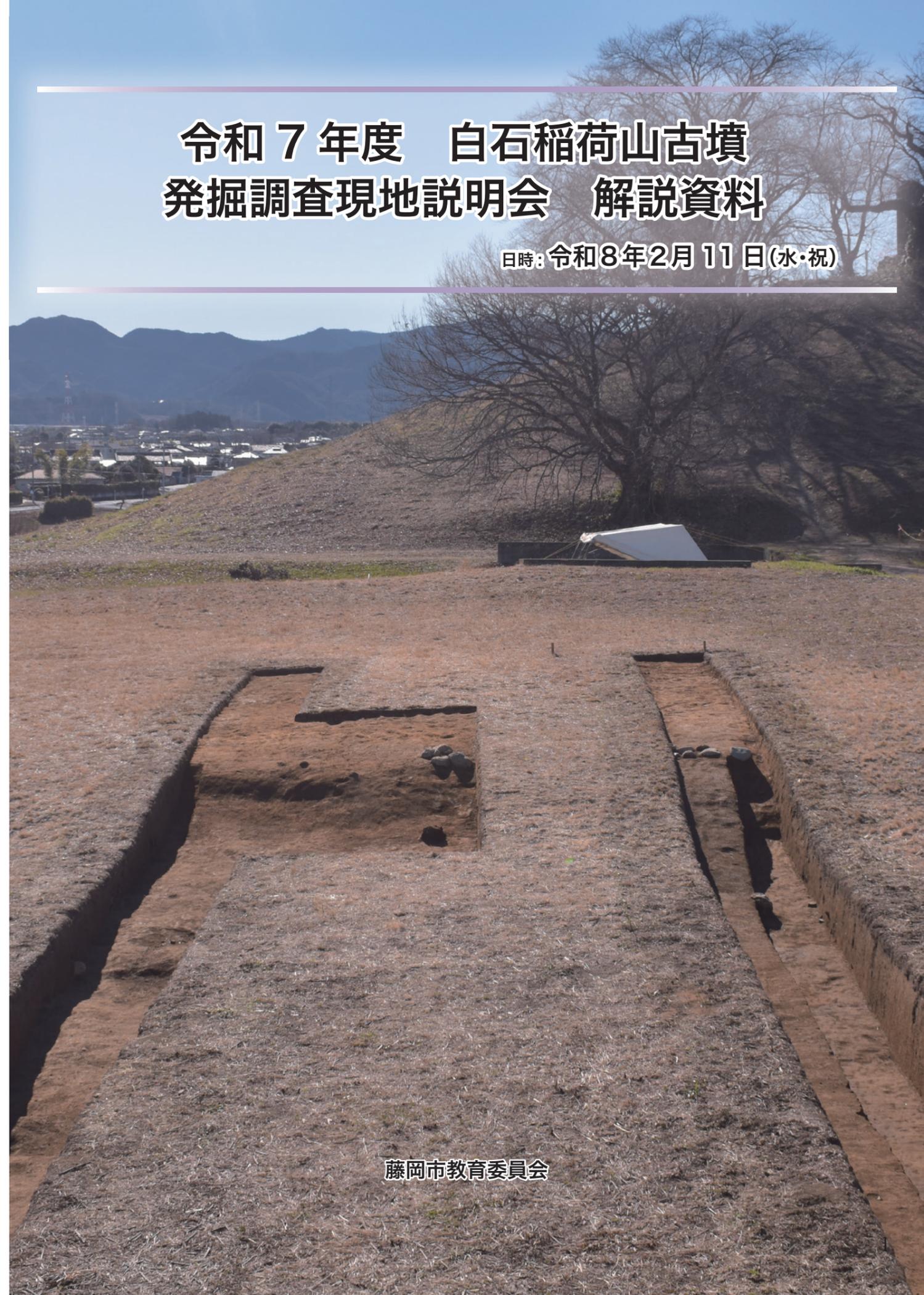
また白石稲荷山古墳北側について、これまでは周濠がめぐると推定されてきましたが、谷地形が入り込むことが確実となりました。古墳の西側は谷地形を延長するかたちで周濠をつくったと考えることができ、自然地形を活かした古墳築造がおこなわれたことがうかがえます。

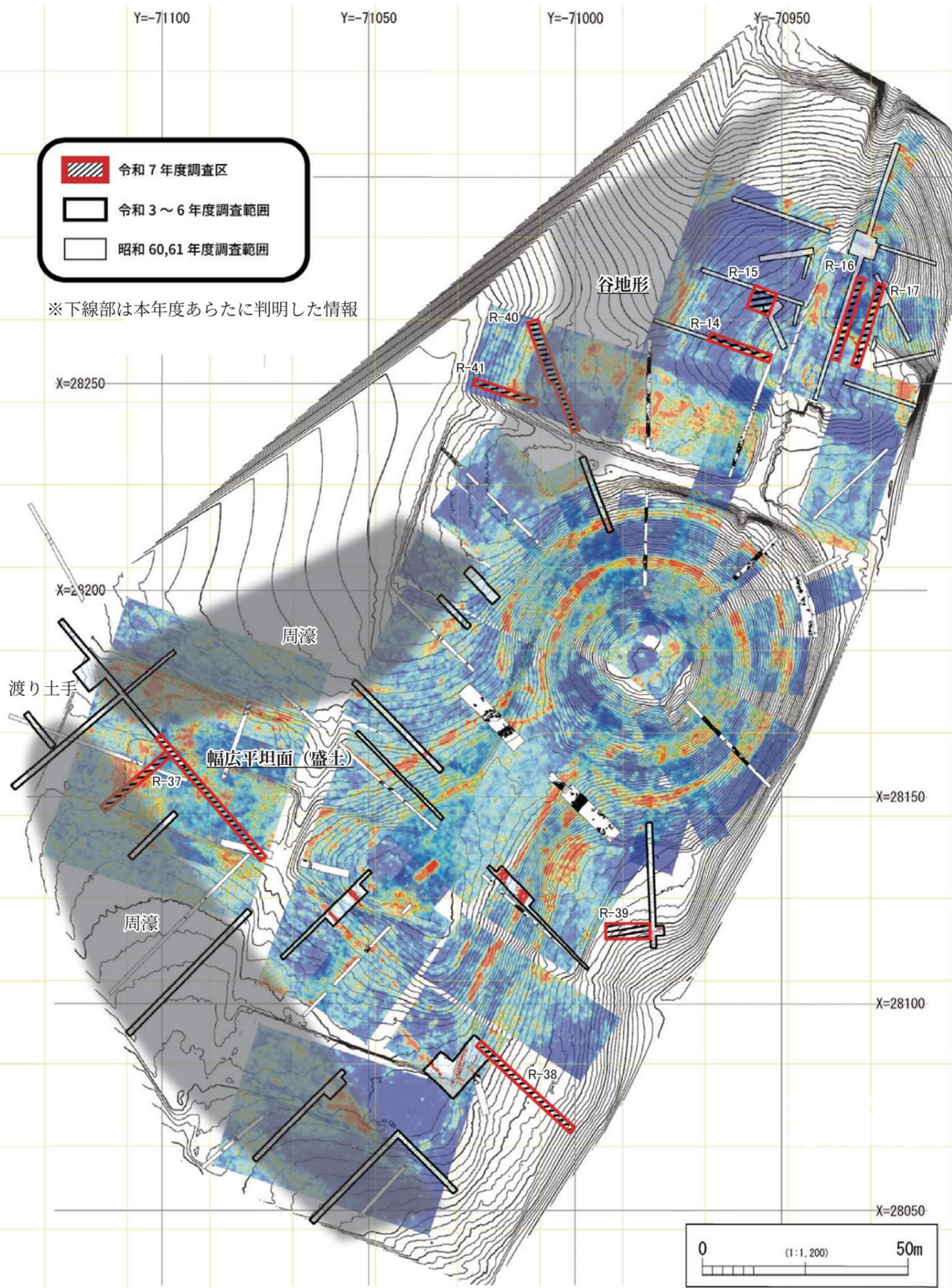
なお、十二天塚古墳と十二天塚北古墳については複数の調査区を設定し墳丘形状の把握を試みましたが、残念ながら残存状態が悪く、形状復元に関わる決定的な情報は得られませんでした。

墳丘西側の幅広平坦面は、その特殊性に鑑みて白石稲荷山古墳を特徴づける遺構と考えられますが、形状、構築方法ともに他に類例のないものであり、その性格については慎重な検討が求められます。

令和7年度 白石稲荷山古墳 発掘調査現地説明会 解説資料

日時：令和8年2月11日（水・祝）

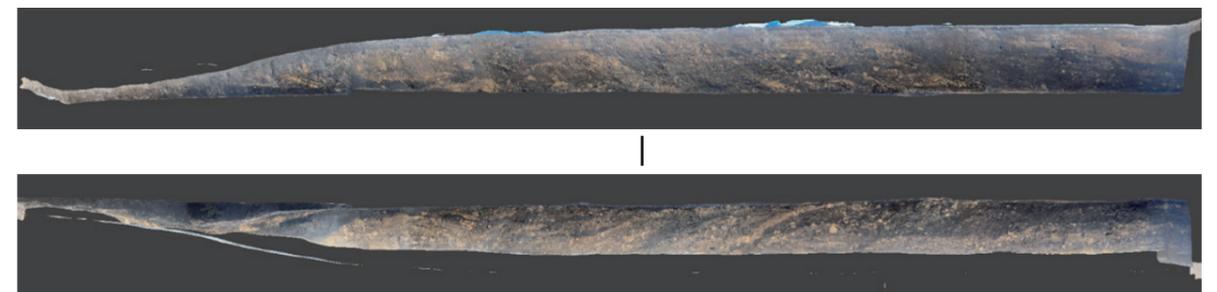




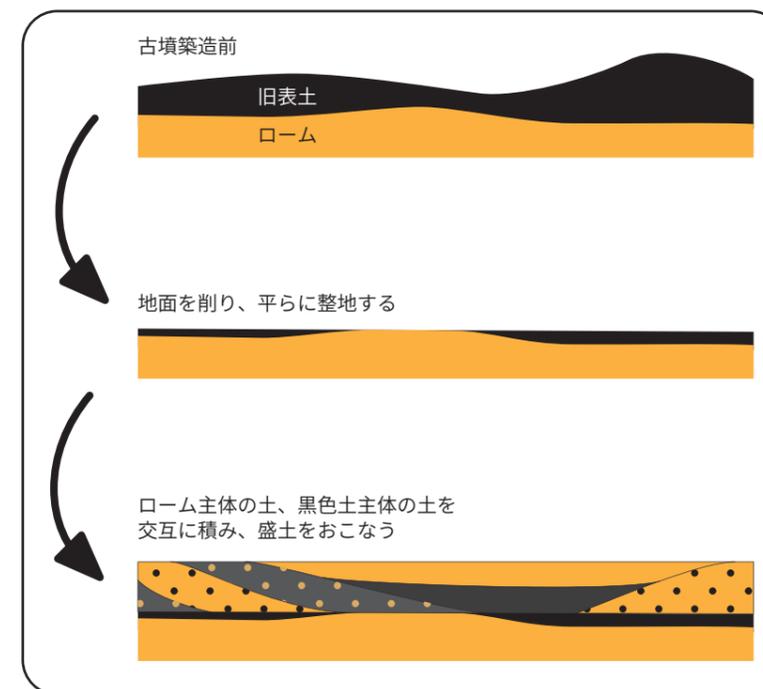
令和7年度調査区の位置と調査成果



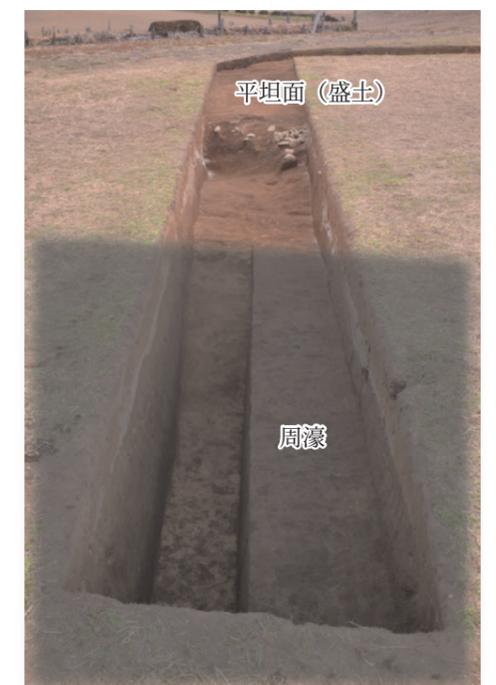
R-40,41 トレンチの調査成果



R-37 トレンチ 幅広平坦面の盛土断面図 (2025.12 作成)



R-37 トレンチ 幅広平坦面の構築工程模式図



R-37 トレンチ 南北方向トレンチの調査成果